

平成28年度 全国学力・学習状況調査結果の概要について

可児市教育委員会

1 調査の概要

(1) 調査の目的

- ・全国的な義務教育の機会均等とその水準の維持向上のため、児童生徒の学力・学習状況を把握・分析することにより、教育の結果を検証し、その改善を図る。
 - ・可児市教育委員会、学校等が全国的な状況との関係において、自らの教育の結果を把握し、その改善を図る。
- *本調査の結果は児童生徒の学力の特定の一部を示すものであり、この結果のみで児童生徒の学力の全体を判断できるものではありません。

(2) 対象学校・児童生徒

- ① 可児市内全公立学校 【11小学校（6年生） 5中学校（3年生）】

(3) 調査内容

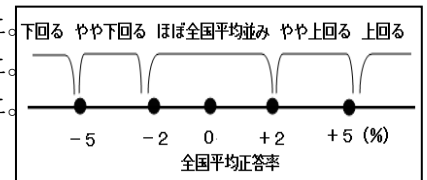
- ① 教科に関する調査（国語、算数/数学） ② 生活習慣や学習環境に関する質問紙調査

(4) 調査日 平成28年4月19日（火）

2 可児市における調査結果の概要

(1) 可児市の傾向について

- 全体的には、小学校は、全国平均をやや下回り、中学校は、ほぼ全国平均並みでした。
- 小学校国語A（主として知識）では、全国平均をやや下回りました。
小学校国語B（主として活用）では、全国平均をやや下回りました。
小学校算数A（主として知識）では、全国平均をやや下回りました。
小学校算数B（主として活用）では、全国平均をやや下回りました。
- 中学校国語A（主として知識）では、全国平均をやや下回りました。
中学校国語B（主として活用）では、ほぼ全国平均並みでした。
中学校数学A（主として知識）では、ほぼ全国平均並みでした。
中学校数学B（主として活用）では、ほぼ全国平均並みでした。



(2) 教科に関する調査結果の分析の概要

- 調査項目ごとに、全国と本市を比較すると、よくできている項目と課題となる項目は、ほぼ一致します。
- 課題となる特徴的な設問は、次の7点を挙げるすることができます。
(「」内は、設問の概要や出題の趣旨 ()内は、評価の観点)
[小国]B「目的に応じて、質問したいことを整理する」(話す・聞く能力)
[小算]A「単位量当たりの大きさの求め方を理解している」(数量や図形についての知識・理解)
[小算]B「グラフから貸出冊数を読み取り、それを根拠に、示された事柄が正しくない理由を記述できる」(数学的な考え方)
[中国]A「語句の意味を理解し、文脈の中で適切に使う」(言語についての知識・理解・技能)
[中国]B「目的に応じて文章を要約する」(読む能力)
[中数]A「数量の関係を文字式に表すことができる」(数学的な技能)
[中数]B「与えられた情報から必要な情報を選択し、的確に処理することができる」
(数学的な技能)

<課題解決へのてだて>

- 小国語Bでは、話し手の意図を捉えながら聞いて自分に必要な情報を得たり、自分の意見と比べながら話の展開に沿って話したりする学習活動を丁寧に行います。この活動は、国語科の学習の

みならず、各教科等の学習や日常生活においても重要となるため、学校教育全体で意図的に取り組みます。

- 小算数Aでは、単位量あたりの大きさの求め方を理解できるようにするために、図や表を用い、これらと式を関連付けながら立式できるよう指導します。誤答の多くが、「4」(8÷14)と「0」(無回答)であることから、授業の中では、立式の根拠を明確にしているかに着目し、一人一人の学習状況や定着状況を見届けるようにします。
- 小算数Bでは、目盛りの大きさの異なるグラフを比較する際に、同じ目盛りの大きさに直して比較した場合との違いを把握し、グラフを比較するときは、それぞれの目盛りの大きさなどに留意して的確に読み取ることができるように指導します。また、日常生活の事象を、表やグラフを用いて考察したり表現したりして日常の生活改善につなげることも大切にします。
- 中国語Aでは、語句についての理解を深めるために、辞書や資料集などを活用しながら、着目した言葉について、複数の類義語で言い換えたり、ことわざや慣用句、故事成語などの表現に置き換えたりすることに加え、比喩を用いて表現するなど、表現の仕方を広げるように指導します。
- 中国語Bでは、文章を要約したり要旨を捉えたりする際に、カードなどを活用して情報を整理し、要約するなど、学習活動を工夫しながら中心的な部分と付加的な部分とを読み分け、内容を正確に理解できるように指導します。
- 中数学Aでは、図に表したり具体的な数や言葉を使った式を利用したりして事柄や数量の関係を捉え、その関係を文字式に表すことができるように指導します。
- 中数学Bでは、実生活での問題を解決する活動を取り入れ、目的に応じて必要な情報を適切に選択し、事象を数学的に表現し処理できるように指導します。

(3) 児童生徒質問紙に関する調査の分析の概要

各質問項目に対する回答の割合は、本市もほとんど全国と同様の傾向を示しているといえます。その中で、全国平均と比べて、好ましいと考えられるもの(回答1, 2の合計が、小中とも全国平均より5ポイント以上よかった項目)について、以下に示します。

- 「(34) 今住んでいる地域の行事に参加していますか」小+16.2 中+34.6
- 「(36) 地域社会などでボランティア活動に参加したことがありますか」小+11.3 中+19.4
- 「(54) 授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていたと思いますか」小+7.0 中+17.8
- 「(29) 学級会などの時間に友達同士で話し合っって学級のきまりなどを決めていると思いますか」小+6.2 中+11.7
- 「(32) 先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」小+5.1 中+9.4

学力調査の上位者(国A, B・算/数A, Bの全てで正答数8割以上の児童生徒)と下位者(全てで平均正答数の半分以下の正答数の児童生徒)の回答状況を比較すると、携帯電話やスマートフォンの所持率や使用時間に顕著な差が見られるなど、幾つかの設問で回答に差が出ています。

これまでの調査とともに、本調査結果を今後の指導の改善を図る資料として活用していきます。

3 全国学力・学習状況調査の活用について

- 本調査において、正答率が低い問題については、市全体で課題を共有し、全職員の共通理解をもとにして、日々の授業改善に取り組みます。
- 各小中学校においては、これまでの全国学力・学習状況調査の結果を踏まえ、基礎的、基本的な知識・技能を確実に習得させるとともに、それらを活用する学習を充実します。また、「わかる、できる授業」となるように岐阜県が重視している「3つの見届ける(実態を見届ける・学習状況を見届ける・定着状況を見届ける)」を確実にを行う授業を目指して取り組んでいきます。
- 引き続き、『家庭生活5つのポイント』を活用して、保護者に「学力」と「児童生徒の意識・生活面」とのつながりについて伝えていきます。「①生活のリズムを整える ②時間を活用する ③ふれあう時間をつくる ④よさを認め励ます ⑤地域との関わりを深める」ことで、家庭における基本的な学習習慣や生活習慣の確立を図ります。